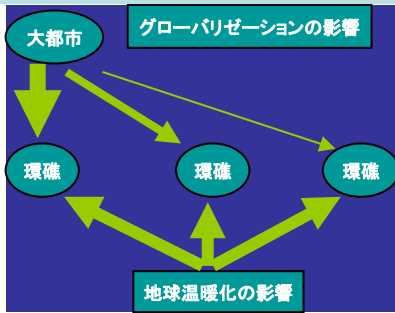


鹿児島大学多島圏研究センター 平成19年度ミクロネシア連邦学際調査・調査報告 ミクロネシア環礁域生態系における 環境変動の影響を類型化するための定量的調査

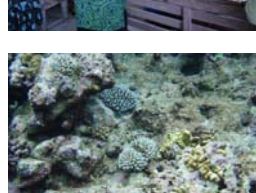
目的

本研究ではミクロネシア連邦の環礁域においてグローバリゼーションの中心(グアム)から近いヤップ州(ヤップ島、ウリシ環礁)、遠いポンペイ州(ポンペイ島、モキール環礁、ピンゲラップ環礁)の島嶼群を対象にし、以下のことを行うことを目的としている。

- 1) 島々において自然環境と社会経済システムにおいて地球温暖化とグローバリゼーションに影響を受けやすい項目に絞りそれぞれの影響の度合いを数値化する、
- 2) 各項目の数値を用い環境変動が島々の自然環境、社会経済システム、島全体(自然環境+社会経済システム)に与える影響を多変量解析により類型化しモデル化を試む、
- 3) 最後に、グローバリゼーションにおいて「中心—周辺」という仮説を検証し、地球温暖化が環礁域の自然環境に与える影響について評価する。



仮説
グローバリゼーションの影響は都市に近いほど影響は大きい。地球温暖化の影響は低島においてはほぼ等しく影響を受けている。



1. 長嶋俊介 (多島圏研究センター)

ピンゲラップの防潮壁・道路境界コンクリート・ソーラ浸透・犬排除・不在キングと地区教会秩序が印象的。モキールでは教会建設・干魚薫製・真珠養殖に日本寄与。クラフト生産も高技術者被尊敬。世襲キング制を廃止・島出身者の教育官界医師等での活躍度が高い。子どものエルニーニョの歌も印象的。ジョージ島での両島出身者集落は、受け入れ先コミュニティとして重要だが、2010年移住100周年で別ライフスタイル社会を形成。国内外出入りが多い。ウ村はコロナ郊外だが伝統社会位階が残存。現役政治教育界リーダーも存在。人口比の店舗数が多く、中レベル店舗は1軒。ケーブルテレビが入り、ビデオ店衰退DVD店健在。高校生で飲酒記載が気になった。一部分析に可能データ箇所もあり、他域中心域比較に活用予定。詳細分析はこの社会構造の段階内容区分と個人的背景・ライフスタイル区分とで、総合化した。仮説の検証にまで進めそうな最低限のサンプル数を得た。定性的理解を優先しつつ定量分析をする予定である。(写真:ピンゲラップ島の子供たち)

2. 遠城道雄 (農学部)

ポンペイ本島と離島部にあたるモキール、ピンゲラップ両島において、農業や食生活の調査を行った。いずれの島でも主食と考えられるのはコメである。ポンペイ島では日本統治時代にコメ作りをしたとされるが、現在はすべて輸入米である。以前は、スワンブタロが主食であったと考えられるが、現在も栽培されているものの、主食とは言い難い。しかし、離島部では、本島からの輸入食料の輸送が難しいということもあり、スワンブタロが重要な作物であることに変わりはない。このタイロイを栽培するためには、湿地が必要であり、湿地を形成するための土壌作りや真水の供給は不可欠で、技術が必要である。また、本島では多く栽培されているキャッサバの栽培が離島部では全く見られず、試作をしたがうまく生育しなかったとのことであったので、品種や土壌などの点からも検討が必要であると思われる。(写真:重要な食料であるパンノミ)

3. 野田伸一 (多島圏研究センター)

ピンゲラップ島に関して、Lonely planet 社から発行されている観光案内書Micronesiaには、“Pingelap has three islands but all of the atoll’s 182 people live in Pingelap Island, which is unfortunately thick with flies and mosquitoes”と書かれている。ピンゲラップ島は蝇と蚊の島ということである。この説明から思い浮かぶのはゴミが散乱した不潔な生活環境である。ところが小型飛行機から降り立った実際の島の状況は全く違っていた。家の周辺や道路はきれいに保たれており、このような島でよく見かけるヤシ殻や空き缶などの小容器が散乱し、そこから蚊が発生するという状況はなかった。島での生活に水は欠かせない。ピンゲラップ島は降水量が多いことから、屋根の雨水を大きなタンクに集めて生活水にしている。この水の大腸菌群を調べたが、40%から少数が検出されただけで、水質はほとんど問題ないように思われた。大きな水タンクには覆いがあつたが、中型の水タンクには覆いがないものがあり、蚊の発生源となっていた。この他、住宅周辺に置かれた比較的大きな容器なども発生源となっていた。しかし、ここに宿泊中、蚊は蚊取り線香で対応できる程度で特に多いという印象はなかった。(写真:プラスチック容器に発生した蚊の幼虫)

4. 西村 明 (法文学部)

宗教研究の視点から、今回の3か所の調査地でどのようなグローバル化の影響度の違いが認められるだろうか。いずれも約150年前にアメリカから伝えられたプロテスタントの影響が強い場所だが、ポンペイ本島から最も離れたピンゲラップ島では、教会での日曜礼拝や各礼拝堂における毎週の礼拝への参加者率は高く、活気が見られた。他方、より本島に近いモキール島では、参加者はまばらで活気がない。とくに若者の参加がほとんどなかったのだが、それには人口流出に加え、アルコールやドラッグの影響があるようだ。これら離島部がほぼ一つの宗派で占められているのに対し、本島では、カトリックやプロテスタント諸教会に加え、アメリカのモルモン教、日本の創価学会、韓国の統一教会といった新宗教が近年入ってきている。これら観察やインタビューから窺える傾向が、おそらくアンケート結果にも認められるはずである。(写真:ピンゲラップ島の日曜礼拝)

5. 河合 溪 (多島圏研究センター)

太平洋島嶼域は1997年から1998年にかけてエルニーニョ現象により様々な点において大きな影響を与えた。例えば沿岸域のサンゴ礁は大打撃を受け、それに伴い生物多様性、漁業活動に大きな影響を与えた。10年がたった現在、沿岸域のサンゴ礁の回復状況をスキンドайビングで2007年11月6日から11月19日までミクロネシア連邦ポンペイ州のポンペイ島、モキール環礁、ピンゲラップ環礁において現地調査を行った。その結果、モキール環礁とピンゲラップ環礁ではある程度回復は進んでおり、水面から見たとき小さいがサンゴの群体が各所に見られた。一方、ポンペイ島ウー村沖の礁湖内でのサンゴの被覆率は非常に高かった。3箇所で見られた回復の度合いの差は現時点で明白でないが、1998年以降サンゴ礁の回復が少しずつ進んでいることは明らかになった。(写真:モキール環礁のサンゴ)